退職を迎えて－現場の思い出から

1975年に入所し、平城に７年、藤原11年の後、奈良市に５年勤め、奈文研に戻って、藤原８年、最後に埋文２年で定年を迎えました。発掘部門が長く、楽しい年月を過ごさせていただきました。

初めての担当者を経験した宮跡庭園（結局取り壊しとなった奈良市史跡文化センター）、「和同開珎」鋳型が出土した奈良郵便局、複雑極まりなかった石神遺跡、とにかく大変だった飛鳥池遺跡、新しい知見が続いた藤原宮朝堂院や、私の最後の発掘となった高松塚古墳墳丘の調査などが特に印象的です。

1990年12月1日　石神遺跡現地説明会にて

「和同開珎」鋳型は、現場での休憩時間中の‘排土の投げっこ’での発見でしたが、これで“仕事・発掘は楽しくやらなくては”と思いました。藤原では何かにつけて分布調査に出かけ、‘土産’に食材を持って帰ってきたものです。石神遺跡の現場がテレビドラマのロケ地になったこともありました。遊び心・余裕は新しい発見・発展には必要なことではないかと思います。時代の流れとはいえ、大忘年会や運動会がなくなったことはさびしいことです。

それと、伯耆国庁・神野向遺跡・結城廃寺などいわゆる外部調査も思い出深いものです。当時でも調査部内で外部調査の是非について議論がありましたが、地元の研究者との共同作業はとても貴重な経験です。海外との共同研究が多くなっている中で、困難な面もありますが、発掘調査から整備まで遺跡に関わる体制がぜひ必要かと思います。

昔はよく引越しに行きましたが、現在の本庁舎と藤原の新庁舎への引越しの両方を経験しました。残念ながら念願の新しい本庁舎への引越しの手伝いはかないませんでしたが、一日も早く実現し、奈文研の新たな進展の契機になることを祈っています。

長い間お世話になりありがとうございました。

（埋蔵文化財センター長　安田 龍太郎）

33年間を振り返って

1975年４月に入所し、配属された研究室は、計測修景調査室（当時）で、室長は牛川喜幸氏、室員に田中哲雄氏、高瀬要一氏、研究補佐員として福原まり花さんがいた。また、当時埋蔵文化財センターにおられた今は亡き伊東太作氏、庶務課の渡辺康史氏、考古第一調査室の佃幹雄氏らに目をかけてもらったりしたことが、大変なつかしく思い出される。

緊張した面持ちで初めて研究室に顔を出した日、田中さんからいきなり足のサイズを聞かれ、ビックリした。それは、当時、研究所で盛んであったサッカー部への無言に近い誘いであった。

還暦祝いのユニフォームで高瀬文化遺産部長と

大雨のなか、牛川さんの後任室長の安原啓示氏と２人だけでサッカーボールを蹴り合ったこともなつかしく思い出される。

研究面では、計測修景調査室にいた５年間、平城宮跡の発掘調査に従事するかたわら、写真測量の手伝いで沖縄のグスクや奈良県五條市の町並み、鳥取城の石垣調査などに同行したことなど、楽しい現場ばかりであった。しかし、1979年の秋には、その後の人生を大きくかえる出来事があった。当時の所長、坪井清足先生から、突然「オイ。光谷、デンドロをやらないか。」と言われたのに始まる。これは、年輪年代学の研究をやるようにという、御達しであった。1980年４月からは埋蔵文化財センターに移り、年輪年代学の研究を本格的に開始した。当初、田中琢先生や佐原真先生の叱咤激励を受けたのも、今では思い出深い。年輪年代法が今日のように確立できたのも奈文研にいたからできた研究だと思っています。今後とも、奈文研の大いなる発展を期待します。

33年間もの長きにわたって、皆様からいただいたご厚情に対し、ここに心より感謝申し上げます。

（埋蔵文化財センター年代学研究室長　光谷 拓実）